

茨城県畜産センター
平成27年度評価書

平成28年11月
茨城県畜産センター
評価委員会

【様式6】

□総合評価

評価: A	試験研究機関に期待される役割や目標等に照らし合わせ、質・量の両面において着実に取組みを実施していると判断できる。 (平成23年度:A 平成24年度:A+ 平成25年度:A- 平成26年度:A)
生産現場での課題の解決に向けて研究している姿勢や、試験研究の成果を普及に結びつけられるよう組織的に取り組んでいることは評価できる。 技術相談、技術指導及び優良遺伝資源の生産と供給に意欲的に取り組んでおり、目標値を大幅に超えて達成している項目が多い。また、他機関との連携として、共同研究、普及組織との連携、行政・関係団体との連携に積極的に取り組み、多くの成果やその普及について大きく前進していることも、大いに評価できる。 引き続き、教育活動への協力や地域観光資源としての施設活用、畜産農家や一般県民への分かりやすい広報・情報提供、県民ニーズの把握などに努め、県民に開かれた畜産センターとして活動していただきたい。 また、内部人材育成などにより研究力の向上を図り、主機関としての外部資金獲得や筆頭著者論文数を増やすなど、畜産センターの一層の機能強化を期待する。	

□項目別評価

i) 県民に対して提供する業務

1) 試験研究等

評価: A

①牛受精卵移植技術を利用した牛白血病ウイルス伝搬防止に関する研究 県内の生産現場で大きな問題となっている牛白血病について、ウイルスの体液中への排出状況と受精卵移植等で用いる器具類による感染媒介の可能性を明らかにし、水平感染防御法の有効性を実証したことは評価できる。 受精卵移植による優良子牛の増産と牛白血病ウイルス浄化に向け、関係者への効果的な普及に努めていただきたい。
②地鶏の遺伝子ホモ化に伴う不良形質発現抑制技術に関する研究 凍結精液を活用することで、近交度の上昇を一定程度抑制できる可能性を見出した点は評価できるが、近交度を低下させるために外来遺伝子を導入すると、本来持っていた安定性が損なわれる可能性もあり、生産形質に劣化が見られなければ、このまま維持したほうがよいとも考えられる。 銘柄地鶏の維持のため、後継研究に期待したい。
③茨城県における黒毛和種繁殖牛の周年放牧実証試験 水田や秋季備蓄草地を利用しての冬季放牧という、県内で利用可能かつコスト的に優れた周年放牧技術を確立したことは大いに評価できる。 今後は、肉用牛研究所における実証展示などにより、生産現場へ技術普及をさせることが重要だと思われる。また、草の生育状況は地域や年毎に変化するので、農家への細やかな指導を行い相談や要望に適切に回答できる体制を整備してもらいたい。

2) 技術相談・依頼分析

評価: A

技術相談に適切に対応しており、畜産関係団体が主催するコンクール、共励会等にも積極的に協力し、県内の畜産振興に貢献している。依頼分析の件数も多く、畜産農家への貢献度は高い。 なお、相談等については、農家からの技術相談と一般的な相談との区別ができないので、次年度以降は専門的な技術相談と一般的な質問とを分けて成果を示していただくと、より分かりやすい。
--

3) 施設利用

評価: A

設備・施設の外部利用に随時応じることで畜産家の経営向上に貢献しており、現有施設・設備を有効に活用できていると判断される。
--

4)技術指導

評価： AA

技術指導や講習会が積極的に行われ、本所だけでなく、肉用牛研究所、養豚研究所での取組も多く、総数として目標を大幅に上回っていることは大いに評価できる。
高能力種雄牛や系統豚の普及に向けた取組は県産品のブランド力強化に繋がるので、引き続き積極的に取り組んでいただきたい。

5)成果の普及活用促進

評価： A

研究員と普及員の連携、また、外部関係団体との連携により、成果の普及に着実に取り組んでいることは評価できる。
今後は、活動の回数に加え、成果がどの程度普及したかを把握し、活動や公表方法の改善に繋げていただきたい。

6)外部人材育成

評価： A

家畜人工授精師講習会の開催支援、新規繁殖和牛入門講座の開催のほか、県立農業大学校と連携して学生の指導を行うなど、畜産関係の人材育成に積極的に取り組んでいることは評価できる。
担い手の確保・育成の観点からも、引き続き、専門家の育成に努めていただきたい。

7)優良遺伝資源の生産と供給

評価： AA

県有種雄牛精液、牛受精卵、種豚等の供給数は目標を大幅に上回っている。その他の活動も積極的に行われており、県内畜産業への貢献度は大変高いと判断される。
今後も安定的かつ継続的に、優良種畜などの供給に努めていただきたい。

8)広報・情報提供

評価： A

出版物やセンター公開ばかりでなく、フェイスブックなど新たな伝達手段を用いて高頻度に最新情報を発信していることは、情報発信力の強化に繋がっていると判断される。学会誌等への論文掲載数も増加傾向にあり、今後も継続した取組を進めてもらいたい。

9)知的財産権の取得・活用

評価： A

牧草(イタリアンライグラス)の品種を育成し、予定どおりに品種登録を達成した。種畜造成も含め、長期にわたる取組が結実したものとして評価できる。

10)教育活動への協力や地域観光資源としての施設活用

評価： A

県立農業大学校の教育活動に協力するとともに、複数の大学からインターンシップを受け入れており、着実に取組を実施したと認められる。今後は、研究に従事する大学院生の長期受入などを行い、研究の活性化にも繋げてもらいたい。
また、防疫上の観点から人の受入が難しい中、体験学習などで非常に積極的に地域の人々を受け入れており、畜産センターのイメージアップに繋がっていると思われる。業務に支障がない範囲でこれからも取り組んで欲しい。

ii)業務の質的向上,効率化のために実施する方策

1)全体マネジメント

評価: A

3機関(畜産センター,肉用牛研究所,養豚研究所)が連携して試験研究の推進,業務の遂行が行われていると判断される。
また,人事異動に伴う研究担当者の変更に際して,引継ぎの円滑化が図られるなどの改善が行われたことは評価できる。

2)他機関との連携

評価: AA

積極的に多くの機関との連携が進められており,各項目が目標を上回っている。特に,普及機関と連携した活動を精力的に行った点は大いに評価できる。
今後は,連携による効果の検証も必要と思われる。

3)外部資金の獲得方針

評価: A

共同研究により外部資金を着実に獲得していることは評価できる。
今後は,従機関としての獲得に加え,主機関としての応募も積極的に進め,より潤沢な資金の獲得を目指してもらいたい。

4)県民(企業,農業者等)ニーズの把握

評価: A

関係団体主催の意見交換会などを通じて県民ニーズを汲み上げ,新規研究課題の立案に反映させている。
生産者,消費者などからの情報収集は,より良い畜産物の生産に不可欠なので,継続して意見交換などに取り組んで欲しい。

5)人材育成

評価: A

各種研修会への参加や学会・研究会への参加など,研究員のレベルアップを図る取組が着実に行われている。
一方で,研究成果の受け手が農家であるため,機関全体としてはともかく,個々の研究課題についてはロードマップどおりに進捗することよりも,間違いのないことのほうが重要だと思われるが,そのような研究態度を研究員に徹底させることができているか若干の懸念がある。内部人材育成にあたっては,こういった点も考慮しながら取り組んでいただきたい。

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)	研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
	評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民に対して提供する業務	1) 試験研究等	A <ul style="list-style-type: none"> ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 ①牛受精卵移植技術を利用した牛白血病ウイルス伝搬防止に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・飼養牛のウイルス感染状況を調べ、体液からのウイルス排出状況を明らかにした。また、受精卵移植に用いる器具等の感染リスクを明らかにした。 ・陽性母牛から採取した受精卵は、洗浄することでウイルスを検出限界以下にできることが分かった。 ・垂直感染の防除に、早期の親子分離と早期のウイルス検査が有効であることなど防除対策を示した。 以上の成果を技術者に移転し、受精卵移植技術を活用した牛白血病の伝搬防止を進め、受精卵産子の損耗防止に繋げる。 ②地鶏の遺伝子多様性に伴う不良形質発現抑制技術に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・循環交配と飼養羽数の増加が近交度の上昇を抑制することを明らかにした。 ・凍結精液の活用が近交度の上昇を抑制することを明らかにした。 ・循環交配と凍結成績の組み合わせによる近交退化抑制技術を開発した。 以上の成果を当センターにおける種鶏群の維持に活用し、安定的な種鶏供給を行い、ブランド強化に繋げる。 ③茨城県における黒毛和種繁殖牛の周年放牧実証試験 <ul style="list-style-type: none"> ・放牧地への牧草の追播はライムギが有効であることを明らかにした。 ・水田の冬季放牧利用では、飼料用米のひこばえとイタリアンライグラスの活用が有効であることを明らかにした。 ・秋期備蓄草を利用するための最適な施肥方法を検討し、牧養力の高い周年放牧技術として確立できた。 以上の成果を、技術体系化チーム等により、低コストな放牧技術として技術移転し、和牛増頭に繋げる。 	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成
	2) 技術相談・依頼分析	A <ul style="list-style-type: none"> ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 【技術相談】 <ul style="list-style-type: none"> 畜産農家等からの技術相談などに対しては、随時対応し、助言・指導を行った。 ・畜産農家等からの技術相談 44回(参考H26, 42回) 主な指導内容(種畜の交配方法, 牛の繁殖技術, 飼料調製法, 家畜排せつ物の処理等) 【依頼分析】 <ul style="list-style-type: none"> 自給飼料の分析や家畜ふん堆肥の依頼分析を行った。依頼のあった自給飼料や堆肥等の分析を通して農家の経営向上に貢献することができた。 また、堆肥コンクール, サイレージ共励会に積極的に協力し、審査員を務めた。常陸牛共励会や枝肉共励会等の審査や講評を通して茨城県銘柄の品質向上を支援した。 ・自給飼料依頼分析 120点(参考H26, 130点) ・堆肥・液状コンポスト依頼分析 72点(参考H26, 36点) ・飼料作物サイレージ共励会協力 5回(参考H26, 4回) ・堆肥コンクール協力 1回(参考H26, 1回) ・枝肉共励会協力, 審査 14回(参考H26, 15回) 	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成
	3) 施設利用	A <ul style="list-style-type: none"> ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 畜産関係団体や県民に対して施設を提供したほか、分析機器の外部利用(飼料作物, 堆肥)を図り、所有する設備・機器の有効利用に努めた。 ・施設設備の外部利用 12件(参考H26, 12件) ・機器の外部利用 216件(参考H26, 190件) 	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成
	4) 技術指導	AA <ul style="list-style-type: none"> ○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現 研修会, 講習会等または生産現場において、研究成果等の技術指導, 情報提供を積極的に実施した。団体等が主催する研修会等においても成果等の情報提供を行った。 肉用牛研究所では、高能力種雄牛に関する情報提供を、養豚研究所では系統豚等に関する指導を重点的に行うことで改良を促進し、優良家畜の増頭に貢献した。 ・研修会, 講習会等での技術指導, 情報提供 <ul style="list-style-type: none"> 畜産センター本所 69回 肉用牛研究所 89回 養豚研究所 26回 計184回 	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現 [附帯意見] 高能力種雄牛や系統豚の普及に向けた取組は県産品のブランド力強化に繋がるので、引き続き積極的に取り組んでいただきたい。

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民に対して提供する業務	5)成果の普及活用促進	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p> <p>主な研究成果は、「普及に移す技術」として、農業改良普及センターや畜産関係機関と連携し、速効性肥料成分の簡易分析法の普及の他、技術体系化チームで飼料作物栽培や、飼料用米の利用促進の指導等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成果検討会の開催 1回 ・「普及に移す成果」普及推進計画等に沿った活動 5回 ・技術体系化チーム活動による新技術の迅速な普及 3回 ・主要課題現地検討会 1回 ・セミナー及び現地研修会 6回 	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p> <p>[附帯意見] 今後は、活動の回数に加え、成果がどの程度普及したかを把握し、活動や公表方法の改善に繋げていただきたい。</p>
	6)外部人材育成	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p> <p>大学等が主催する家畜人工授精講習会の実習及び家畜商講習会の開催支援、家畜審査競技会の指導を行ったほか、農業改良普及センターと連携し、新規繁殖和牛入門講座を開催し、人材の育成を図った。県立農業大学校と連携し、学生の指導を行った。常陸牛共励会や豚枝肉共励会等の審査や講評を行い、県銘柄畜産物の品質向上と振興を図るとともに、畜産農家の技術向上に貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家畜商講習会開催支援 1回 ・県主催家畜人工授精講習会開催 1回 ・大学等主催家畜人工授精講習会の開催支援 5回 ・同受精卵移植講習会技術指導 1回 ・畜産共進会・共励会等における審査 14回(再掲) ・高校家畜審査競技会(乳牛)指導 1回 ・普及指導員研修の受け入れ (該当無し) ・畜産農家・農業団体等の視察研修の受け入れ 11回 	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p>
	7)優良遺伝資源の生産と供給	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>種雄牛凍結精液、牛受精卵、系統豚及び地鶏種鶏については、畜産農家等の要望に応じて供給した。種雄牛精液と牛受精卵については、広報の強化と採卵回数を増やす等により計画を大きく上回って供給し、常陸牛のブランドアップと農家の経営向上に貢献した。系統豚の供給も農家の改良意欲の高まりにより大きく供給できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種雄牛凍結精液生産本数 20,046本 ・種雄牛精液供給本数 11,030本 ・牛受精卵供給個数 143個 ・農家繫養牛からの受精卵採取 39頭 ・系統豚等供給(種豚) 201頭 ・系統豚等精液供給 87本 ・地鶏生産用種鶏供給 1,350羽 	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p>
	8)広報・情報提供	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p> <p>試験研究で得られた成果は、主要成果集や研究報告、ホームページ及び畜産関係書誌を使い、積極的に情報発信した。農家等への出張に際しては積極的に情報を提供し、現場への定着に努めた。</p> <p>各種情報は、農家の要望に応えるため、随時ホームページと新たに開設したフェイスブックで提供し、畜産の技術情報を迅速に発信できた。また、酪農体験及び畜産物加工体験での来訪者に対しても広報を積極的に行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主要成果集の掲載 1回 ・年報の掲載 1回 ・研究報告の発行 1回 ・公開デーの開催 1回(1,468人)(参考H26 1,461人) ・酪農体験 36回(1,392名)(参考H26 33回(1,265名)) ・加工体験 43回(1,613名)(参考H26 38回(1,250名)) ・ホームページによる情報発信 50回(参考H26 60回) <p>併せてフェイスブックで214回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「畜産茨城」への寄稿 6回 ・「農業茨城」への寄稿 4回 ・民間書誌への寄稿 1回 ・新聞等マスコミを介した情報発信 取材対応 8回 ・口頭発表 9回 ・査読付き論文発表 3本 	A	<p>○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成</p>

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民 に対して 提供する 業務	9)知的財産権の 取得・活用	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 イタリアンライグラス亜種について、品種登録出願し受理された。 (品種名:「那系33号」, 出願第 30828号, 平成28年2月15日) 種畜造成等(広義での知的財産)については、種雄牛の精液, 受精卵, 系統豚及び種鶏の 供給を行いブランドアップに貢献した。	A	○質・量の両面において概 ね平成27年度計画を達成
	10)教育活動への 協力や地域観光 資源としての施設 活用	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 県立農業大学校へ講師を派遣し, 家畜育種学や, 畜産環境保全の講義を行った他, 県立 農業大学校養成科及び研究生の実習を受入れ, 教育活動の支援と将来畜産を担う人材 の育成を図った。 また, 酪農体験及び畜産物加工体験を積極的に受入れ, 幼児, 児童, 生徒及び一般県民 の畜産に対する理解醸成に努めた。 インターンシップについても茨城大学等の希望により受け入れを行い, 畜産に関する研究 業務への理解を深めさせた。 ・インターンシップ受け入れ 3大学, 3名 ・畜産教育支援 (県立農業大学校等へ講師派遣) 5名 (実習指導) 3回 ・大学生・院生, 県立農業大学校研究科等学生の受け入れ (該当学年0人) ・酪農体験 36回(1,392名) ・加工体験 43回(1,613名)(再掲)	A	○質・量の両面において概 ね平成27年度計画を達成

【様式7】整理表(項目別評価)

畜産センター

評価項目(年度実施計画)	研究所等の自己評価		評価委員会評価	
	評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
ii)業務の質的向上・効率化のために実施する方策	1)全体マネジメント	A ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 畜産センター、肉用牛研究所、養豚研究所が連携を図り、連絡調整会議等を開催し、情報を共有しつつ試験研究を推進した。 また、研修等で得た知識を活用した勉強会や伝達研修等をとおり、職員全体のスキルアップに努めた。 研究課題については、県民ニーズの把握から新規課題を検討し、内部・外部評価を受けて実施した。なお、評価結果はホームページで公開し、情報発信した。 ・所内連絡調整会議 50回 ・室長ワーキングチーム会議 6回 ・畜産センター・研究所連絡会議 6回 ・試験研究課題内部評価委員会 1回 ・試験研究課題外部評価委員会 1回 ・試験研究機関評価委員会 (2回) ・主要成果発表会 1回 ・試験研究設計ヒアリング 1回 ・試験研究課題進捗状況の確認 6回 ・試験研究成果ヒアリング 1回 ・試験研究成果発表会 1回	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成
	2)他機関との連携	AA ○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現 独法、大学、県内外の試験研究機関と連携を図り、共同試験研究(受託含)や研究協力を推進したほか、普及組織と連携し、成果の普及に努めた。 【共同研究の推進】 ・大学との共同研究 3課題 ・独法機関との共同研究 10課題 ・県内研究機関との共同研究 3課題 ・他県研究機関との共同研究 6課題 ・民間との共同研究・研究協力 5課題 【普及組織との連携】 ・試験研究推進のための情報交換 34回 ・研究成果普及のための連携活動 16回 ・技術指導のための連携活動 23回 【行政機関・関係団体との連携】 ・国関係機関主催事業への参加・協力 14回(16人) ・県関係機関主催事業への参加 60回(69人) ・市町村関係機関主催事業への参加・協力 2回(5人) ・JAや畜産関係団体等主催事業への参加・協力 39回(42人) ・その他関係機関主催事業への参加・協力 5回(5人) ・独法研究機関主催事業の推進会議・研究会の参加・協力 24回(27人) ・関係学会・研究会活動の参加・協力 25回(37人)	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
	3)外部資金の獲得方針	A ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 他の研究機関と研究情報収集や連携を強く共同で外部資金研究に参画したほか、団体からの資金を活用して試験研究を推進した。 ・実用化技術開発事業・独法プロジェクト研究課題等の採択・受託 5課題(うち、新規2課題) ・各種団体からの研究課題 1課題 ・獲得研究費 9,618,000円 (内、間接経費) 960,610円	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 [附帯意見] 今後は、主機関としての応募も積極的に進め、より高額な資金の獲得を目指してもらいたい。
	4)県民(企業、農業者等)ニーズの把握	A ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 新規要望課題検討会などを開催したほか、関係団体主催の意見交換会などの会議に参加して要望を把握し、新規研究課題の設定等に繋げた。 ・新規要望課題検討会によるニーズの把握 1回 ・生産者組織団体主催の各種会議、研修会、意見交換会等による生産者ニーズの把握 12回 ・消費者等を対象とした公開デーや意見交換会での消費者ニーズの把握 2回 ・現地試験の実施による生産者ニーズの把握 3回 ・農業経営士等基幹農業者との意見交換会によるニーズの把握 2回	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成
	5)人材育成	A ○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成 国や独法が主催する研修制度を活用して知識を習得し、研究員のレベルアップを図った。また、学会や研究会に積極的に参加し、発表を行ったほか、他機関との交流を図った。これらで得られた知識・情報等を職場全体で共有できるように努めた。 ・国や独法が主催する研修 13回 ・学会・研究会等への参加 25回(37人) ・所内セミナー・職場研修会 5回	A	○質・量の両面において概ね平成27年度計画を達成